



Anchor

アンカー



「わたしたちは喜び楽しみ、
あがめまつろう。
小羊の婚姻のときがきて、
花嫁はその用意を
したからである」
黙示録 19 : 7

第 1 3 号

目次

預言の書—雅歌の研究の重要性.	1
キリストの先在.	7
宝石、装飾品類.	12
研究—ダニエル書 11:40～.	18
ヨーロッパ統合は成るか?	23
質問—ペテロ第一の手紙 3:18～22.	26
広告	

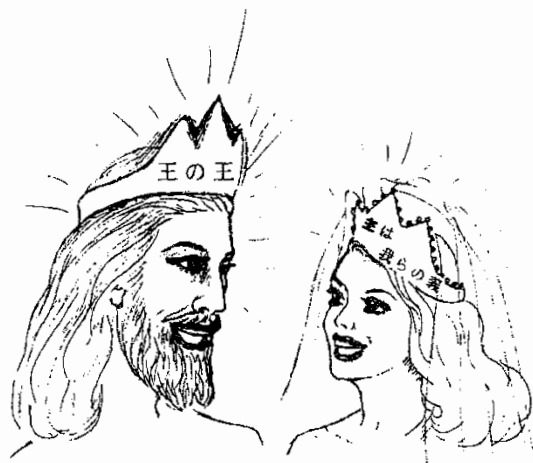
◆アンカーの目的◆

我々は次の事を信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使のメッセージである。(6T p.384, 2SM p.142)
第三天使の使命が再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。
(9T p.98, GCII p.140)
2. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の特別な贖いを受ける。
(EW p.414, 5, 7)
3. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に1888年以来。
(RH 8/26, 1890)
4. ダニエル書 8:14 — 聖所の解明に御業の完成はかかっている。
5. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。
6. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー (錨) は三重の天使の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証 (預言の霊) 等である。
(EW p.417, 1T p.300)
7. アンカーにはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代と信じる。不信仰によって、140年も時は延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している (GCII p.182, Ed p.328)。信仰の義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待つておられる。再臨と御業の完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の義務は何なのか、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。

預言書、雅歌の研究

黙示録のようにおもしろい！



今期の教課は雅歌書の研究になっている。

雅歌書は、最も難解な、謎の書と言われてきた。人間が解釈するにはあまりにも複雑である。かつては黙示録もそうであった。

「旧約聖書のすべての書で、雅歌書ほど解釈に困難なものはない」 The Inter-preter's Bible Commentary, 5-91.

「しかし、ユダヤ人はこの書を最も聖なる書として非常に高く評価している。彼らは箴言は宮の外庭、伝道の書は聖所、雅歌書は至聖所にたとえる。ヨナタン・エドワードは『わたしにとって雅歌書全体が実に楽しいものであった。よく読んだものだ。．．時が経つにつれそれは、瞑想の世界にわたしを連れていく。それはわたしにとって、ますます慕わしいものになった』。確かなことは、かつて知られた最も霊的な人は、この書に非常な喜びを感じたのである」ロバート・リー。

「すべての書卷は聖なるものであるが、しかし、ソロモンの歌（雅歌）は、最も聖なるものである」ラビ・アキバ A. D. 90. Dictionary of the Bible, 4-589.

なぜこのようなロマンチックな詩が聖典に加えられているのであろうか
雅歌はただ単に人間の愛の関係を美しく描いたものとして見るだけでは的外れである。比喩、象徴が何を意味するか、聖句と聖句を比較しながら研究するとき、最後の時

代に特に深い意味を持つものである。つまりSDA的、ダニエル黙示録的、各時代の
大争闘的、終末論的視点から学ぶ必要がある。「群れが今必要としているのは現代の真理である」初文137。この書は難解なジグソーパズルのようなものである。しかし、忍耐強く研究する者には、かつて経験したことの無い「残りの民」の特権と喜びが与えられるであろう。

雅歌とは“The Song of Songs”、「歌の歌」という意味で、「王の王」「主の主」のように用いられている。最高の歌ということである。詩歌として、文学作品として、預言書として深遠な書である。しかも、その取り扱っているテーマは、キリストの花嫁がついに用意を整えて—愛の完成を経て—歴史のクライマックスである花婿キリストの再臨を迎えるということである。

雅歌を理解するうえで重要なポイント：

1. 花婿キリストと花嫁である神の民との結婚関係を描写している。

E. Gホワイトは、詳しい注解はしていないが、雅歌書の解釈のヒントを与えている。

「旧約聖書においても新約聖書においても、結婚の関係は、キリストとその民、すなわちカルバリーの価を払って買いとり、贖われた者たちとの間のやさしく聖なる結合を表すために用いられている。(イザヤ54:4, 5; エレミヤ3:14引用) 雅歌では、**花嫁**がこういうのが聞かれる。『我が愛する者はわたしのもの、わたしは彼のもの』そして彼女にとって『**万人にぬきんで**』た彼はご自分の選んだ者にこう言われる、『わが愛する者よ、あなたはことごとく美しく、少しのきずもない』(雅歌2:16, 5:10, 4:7)」祝79。

2. 花婿と花嫁の対話をはっきりとらえること。

花嫁と花婿の対話が続くドラマである。どの聖句が花婿の言葉で、どの聖句が花嫁の言葉か記されていないので、混乱してしまうであろう。そのために、リビング・バイブルを読むことは参考になる。だが真理の解釈となると、リビング・バイブルに頼ることはよくない。

3. 象徴、比喩、隠喩、たとえを聖書のあちこちから探して理解する。例を少しあげる：

結婚=キリストとその民の関係、①「婚姻は、キリストがみ国をお受けになることを意味している」(大下142) ②「神性と人性の結合」キ実28。

花嫁=特定の時代の教会
=「わが妹」とも言われる。キリストと兄弟関係になる(女の産んだ男子、黙12:4, 5)。

花嫁の母=母なるエルサレム(ガラテヤ4:26)、普遍的教会(アダムから始まり最後の教会144,000も含めて、全教会)。

エルサレムの娘、シオンの娘=おとめ、

10人のおとめと同じ、教会員個人個人

口づけ=和解(ロマ5:10)。

黒=背教(黙示録を見よ)。

日に焼ける=太陽礼拝による背教(大争闘上を見よ)。

昼の時=「法王制の真昼は、世界の真夜中であった」大上57

ぶどう園を荒らす小ぎつね=反宗教改革運動者、「最も恐るべき敵」イエズス会(大上293, 310)。

ぶどう園=教会(イザヤ5)。

はと=聖霊

美しい足(雅歌7:1)=福音伝道者の麗しさ(イザヤ49:2:7, ローマ10:15)。

4. 黙示録はキリスト教会史を七つの時代に区分し、特に七つ目の教会に焦点をあてている。同じく雅歌も、純情な初代教会から始まって、各時代を描写し最後に再臨運動の起こりと背教と覚醒を最も印象的に描き出しているのである。

①初代教会とその背教 1:2~2:7

黙示録の7つの教会と比較して研究するとおもしろい。エペソの時代は、純情の「愛」を持っていた。「あなたのあとについて行かせてください」との願いに、花婿キリストは、迎えに来るまで、この地上で待っているように言われる。「黒いけれども美しい」背教の中に忠誠を尽くす少数派。

「日焼け」迫害。荒野の教会。「ナルドはその香りを放った」スミルナの如く、打たれると芳香を放つ。迫害に打たれるほど、キリストの香りは放たれた。

「昼の時」「法王制の真昼は、世界の真夜中であった」大上57。暗黒時代にあって、真理を掲げて、「わが愛する者は美しい」と言われる。

②ヨーロッパ宗教改革 2:7~17

「見よ、冬は過ぎ、雨もやんで、すでに去り」暗黒時代に夜明けが訪れる。

「もろもろの花は地にあらわれ、鳥のさえずる時がきた。山ばとの声がわれわれの地に聞える」改革の声があちこちから聞こえる。

「いちじくの木はその実を結び、ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ。わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい」改革の進展。

「ぶどう園を荒らす小ぎつね－反宗教改革「最も恐るべき敵」イエズス会（大上293、310）

「ことごとく美しい、少しの傷もない」－第二天使、夜半の叫び－イエスのみ像が反映されていた。しかし彼らは主に会う備えができていなかった。（初文393）（大下140）。

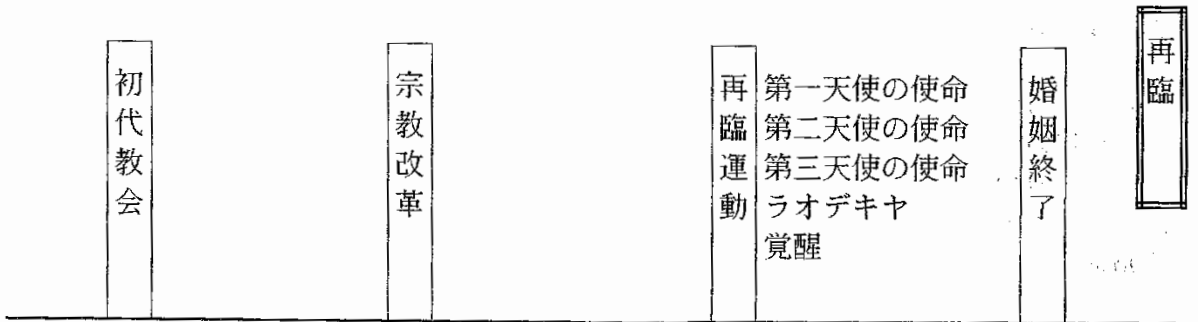
「わたしはわが愛する者のために開いたが、わが愛する者はすでに帰り去った。彼が帰り去ったとき、わが心は力を失った。わたしは尋ねたけれども見つからず、呼んだけれども答がなかった」 大失望－第三天使の誕生

③再臨運動 3：1～8：

「わが魂の愛する者をたずねた」終わりの時至って、預言の研究が世界各地でなされる。
－第一天使の使命、プロテスタントの眠りと覚醒

セブンスデー・アドベンチストの象徴的描写 6：7：

ラオデキヤ状態 覚醒 印された教会、成熟した教会の姿。 8
：



5. 教会の完成は愛の完成である。花婿キリストの愛に完全に応答するようになる。

エルサレムの娘たちよ、わたしは、かもしかと野の雌じかをさして、あなたがたにい、お願いする。愛のおのずから起るとまでは、ことさらに呼び起すことも、さすこともしないように」雅歌2：7、3：5、8：4

雅歌書に3回繰り返されているこの言葉が、教会歴史において重大事件が起

こる前にいつも出てくることは興味深い。

①暗黒時代に教会は荒野へ逃げていった。キリスト教はほとんど消滅するがのように見えた時代に適応される。

宗教改革の直前に位置している。

②1800年代、プロテスタントの墮落と危機の時、再臨運動が起こる。

③SDAの危機と沈下が最高の時、ついに花婿なるキリストの愛に、完全に応答し、大いなる叫びが起こる。

6. 至聖所における「最後のあがない」を理解することが雅歌書の研究の最も重要な鍵である。

サタンが最も憎んでいる真理は何であろうか？

「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕らえ、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能者の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである」大下221。

いつ花嫁なる教会は主に会う用意ができるのであろうか？

1. 聖所の清めが終わるときである。調査審判の時、罪が除去されて、「栄光の姿の教会になる」とき。
2. 最後のテストが来る時。
3. 「婚姻の時が来て」黙19:7。

「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中に更に明瞭に示されている。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』マラキ書 3:4。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである』エペソ 5:27。『このしのめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者はだれか』雅歌 6:10。』 大下140～141。

「すべての魂にテストがやってくる時はそんなに遠くはない。獣の刻印が我々に強制されるであろう。... サタンは激しく忠実なちを苦しめるであろう。しかし、イエスの名によって、彼らは勝ち得てあまりあるのである。その時教会は『月のようにうるわしく、太陽のように輝き、恐るべきこと旗を立てた軍勢のように』現れるであろう」5T81、82。

教課20、38頁に、キリストの花嫁が花婿を迎える用意をするのは、再臨前審判の時と説明されている。1844年に再臨を迎えるためにひたすら用意をしていた聖徒達に対して次のように言われていた：

「その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられんことを期待していた」初文393。

「しかし、彼らはまだ会う備えができていなかった」大下140。

なぜであろうか？まだ婚姻の時が来ていなかったのである。花婿なるイエスは、ご自分の花嫁のために、特別な働きをなさるために、至聖所に入られた。そこで「最後

のあがない」=Final At-one-ment=一体となること=結婚(創世紀2:24)が完成されるのである。「神性と人性の結合」=婚姻である(キ実287)

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである」大下141。

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民に再現される時に、彼らをご自身のところに迎えるために、主は来られるのである」キ実47。

雅歌：「3:11彼は婚姻の日、心の喜びの日に、その母の彼にかぶらせた冠をいただいている」

黙示録 19:7「わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時婚姻がきて、花嫁はその用意をしたからである」

黙示録 19:8「彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」

教会は主を迎えるために「み業完成」のために、様々なことをやって来た。「1日1千人」「ターゲット～年」「ハーベスト～年」「教会成長」「小グループ」…。しかし、花嫁が用意を整えて、イスラエルが麗しく栄えるときは、いつどのようにしてなされるかという理解と経験がなければ、福音完成はないし、再臨に備えることは出来ない。

結婚式への招待状は、まず神の民に送られた。教会は、昔のユダヤ人のように結婚式の部屋に行くのを拒み続けている。

婚姻の式に入るとはどう意味か？

各時代の争闘から引用したい。

現代版は訳が間違っているので、古い訳から引用する。第24章の143頁からである(新)。古いのは160頁から。

「婚姻=結婚式」と「婚宴=披露宴」の区別が、新しい訳ではなされていない。古い訳では、結婚式は再臨前であることがはっきりしている。婚宴は天国において、再臨後に催されるのである。新しい訳の「婚宴」のところを「婚姻」に直さなければならぬ。

「『見よ花婿来る』との1844の夏の布告は、多くの者に主が今すぐ来臨したもうごとく予期せしめた。指し示された時に花婿は来るには来たが、民たちの予期せるが如くこの地上ではなかった。天上の日の老いたる者すなわち神のもとに婚姻にのみ国を受けに到り給うたのであった。『備えをせし者どもは彼と共に婚姻の式に入り、しかして門は閉ざされたり』と。彼らといえどもその身をもって婚姻の式に待てるを得ない、如何となればそれは天において行わるるものであり、彼らは地に住むものだからである。キリストの弟子は『主人が婚礼より帰り来る』を待たねばならぬのである。しかしながら、キリストが神のみ前に到り給うとき、彼らはそのご行為(働き)を理解し、信仰によりてこれに従わねばならぬのである。かかる意味からここでは、彼らが婚姻の式に入ると記されているのである」

★ 教課ではこう説明している。

38ページ：

「天の花婿であるキリストと彼の民である地上の『聖徒』との結婚式は、再臨前審判の完了と共に終わります。このあとにイエスの再臨が続きます」

さらに、

「『小羊の婚姻の時』(黙19:7)とは、神のしもべたちの勝利をもって終わるさばき(2節)をさしています。(大下145)。この再臨前審判のあいだに、キリストの花

嫁、つまりキリストを信じる「聖徒たち」は、キリストの恵みによって再臨に対する備えをします」

ところが、誠に残念なことは、「誤り」「矛盾」が書き加えられている：

21頁のダイヤモンド印のところの説明は英文の原文にはない。

「小羊の結婚式（再臨）」とある。せっかく再臨前審判＝小羊の結婚式と説明しているのに、再臨の時に結婚式とされている。

預言者は何と言っているかはっきりしておこう：

「わたしは、イエスが、至聖所におられるときに、新エルサレムと結婚なさることを見た。そして、至聖所における働きが終わったあとで王の権威を持って地に下り、忍耐深く再臨を待望していた貴重な人々を、ご自分のところにお迎えになるのである」初文410。

「イエスが聖所で奉仕しておられた間に、審判は死せる義人から生ける義人へと続けられていたのである。キリストは、ご自身の民のためにあがないをなして彼らの罪を消し去り、み国を受けておられた。み国の民はもうできあがっていた。小羊なるキリストの婚姻は終わった」初文452。

再臨前審判（さばき）は結婚式なのである。とすると、さばきは素晴らしいことである。よき訪れである。一体何人の者がさばきは福音と考えているだろうか？ 三天使の使命は「永遠の福音」である。①さばきの時は来た。小羊の婚姻の到来を告げる。義認の完全な成就。②バビロンからの脱出、自我からの解放。永久に。③完璧な服従。神の律法を全宇宙に擁護する。

結婚式に入るように、今招待されているのである。「婚姻に入る」ということは、キリストの至聖所における大祭司としての立場と働きを理解し、信仰によって入ることなのである（大下145、222）。しかも、その結婚式は、花嫁の応答がないため、備えができていないため、ずっと延ばされているのである（大下182）。

再臨の時に結婚式がなされるという考えが最もすばらしい結婚式＝最後のあがない＝FINAL ATONE-MENT＝神性と人性の結合の経験にあずからせない結果にする。

もう一度言わせてもらおう。これこそ、今日わが教会に考えさせまいと、経験させまいとサタンが狙っていることであり、あらゆる策略を考えだすのである。サタンが最も憎んでいる真理だからである。（大下220）。

今期、雅歌書を学ぶに当たって、サタンが隠そうとしている大事な真理を研究することによって、「神の深み」に入る経験を切に求めようではないか。

雅歌 8:14「わが愛する者よ、急いでください。かんばしい山々の上で、かもしかのように、また若い雄じかのようになってください」

黙示録22:17, 御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい

黙示録22:20, これらのことをあかしするあなたが仰せになる、「しかり、わたしはすぐに来る」。アメン、主イエスよ、きたりませ。 ■

キリストの先在性

デビッド・ミラー

昨年私は米国の私の生まれ育った町を訪れた。安息日の朝教会へ行く準備をしていると、SDAではない私の母が読んでいた新聞の中に、地元のSDAの牧師が解雇されたという記事を見つけた。

私は教会へ行って、事の真相を調べた。その牧師はセレブレーション（祝典）運動に反対していて、彼は自分がそのために退かされたと考えていた。その日私は教会内の親しい友人を何人か捜したが、彼らは教会を去ったことが分かった。後に聞いたところによると、彼らは自分達の家で集会を持っているということであった。彼らは次の3つの理由で教会を離れたようである。1) 彼らも牧師と一緒に、反セレブレーションの立場を取った。2) SDA教会はバビロンとなってしまうっており、そこから分離する時が来ている、という意見を持っていた。3) イエスは過去に存在しなかった時がある、という教理を掲げていた。彼らは、イエスは神ではないと述べているのではなく、彼が存在していない時があったと言うのである。彼は「父のひとり子」であったので、彼が存在する以前に父が存在していた、と言うのである。

● セレブレーション（祝典）の礼拝形式

1) セレブレーションの礼拝形式を我が教会が取り入れていることは、決してなくなることはない深刻な問題であり、私達は全力をあげてそれに抵抗すべきであると、私は信じている。それは神からのものではない。これについては前にこの記事で取り上げたことがあるので、ここでは取り扱わないことにする。

● SDA教会はバビロン？

2) SDA教会はバビロンではないと、私は信じている。仮にそうであったとしても、そう呼ぶことによって得るものは何もない。それは自らを教会員仲間から離れさせることにしかならない。SDA教会はラオデキヤであり、最悪なことに背信した霊的イスラエルとなってしまった、と私は考えている。私達は多くの問題を抱えており、それらに対処しなければならない。いずれ教会組織からは離れなければならない時が来るかもしれないが、それは今ではないと私は信じている。だがそれは各自が自分で決断しなければならないことである。教会には今でも救われるべき尊い魂が見られるので、私は教会に残るのである。他にどこへ行けば良いと言うのだろうか。

● キリストは永遠の昔から存在するのか？

3) キリストが永遠の昔から存在するお方であるかどうかに関して、初め私は執筆しないつもりであった。なぜなら、それは単に私達の心を真に重要な事柄である現代の真理から遠ざけることにしかならないと考えたからである。この教えの結末は結局それであると、私は今でも考えている。サタンはこの問題をややこしくするために、できるだけ多くの不必要な事柄を提示して、私達を現代の真理から引き離そうとしている。あらゆる偽りの教理の風に抵抗するために、私達は真理に深く根ざしていなければならないと、エレン・ホワイトは述べている：

「私は彼らが反対の感化力に合い、誘惑に圧迫され、真理に深く根ざしていない者は皆確かな土台から動かされるであろうと私は警告した。

ありとあらゆる教理の風が吹きまぐるであろう。揺さぶられるものはすべて揺さぶられ、決して揺さぶられないものだけが残るであろう。……」(レビュー・アンド・ヘラルド1883年11月6日)

● この教えが広まっている

この問題に関して記事を書くつもりはなかったのだが、1月程前ある旧友の妻が私の家を訪れ、これについて話をしたことがあった。私の故郷の元牧師は米国中を旅行して廻りながら、現代の重要真理を人々に説いている、ということであった。私の故郷にある教会の人達も、この事柄について私を説得しようとしたのである。

その友人の妻は、イエスが存在していない時期があったと、皆に言って廻っていた。その時以来、私は自分がこの事に関して何か書くべきであると感じた。まず、これについてどちらか一方の見解を信じることによって何か違いが出るのか考えた。こと現代の真理に関する限り、恐らく大した違いはないであろう、というのが私の結論であった。

この教えに関して私が持つ恐れは、それが私達を現代の真理の路線からはずし、他の「教理の風」に巻き込むのではないか、ということである。私はできる限り、現代の真理の重要な事柄に自らを捧げたかったのである。

今日、現代の真理をなおざりにしてまでこの問題に深入りしないようにと、人々に警告することが自分の義務であると感じる。私達は真に重要な事柄に心を向けおかなければならない。本質からそれて、さほど重要でない事柄を最も重要なものとしてはならない。先の私と話をした女性は、あたかもそれが私達の永遠の救いにとって重要であるかのように話し、私が同様の事

を信じるように説得することが自分の義務であると考えていた。あたかもそれが、現代に生存する私達の救いを決定する試金石かのようにである。

● これを信じることによるマイナス要因

このキリストの先在性に関する問題が、現代の真理にとってそれ程重要であるという確信は私にはない。けれどもそれは全宇宙の目にキリストの格を天父よりも下げてしまうことは確かである。またこの問題について私達が多くの時間を費やし、これを現代の重要真理としてしまうことになる。そうすることにより、私達の目は現代の真理から遠ざかり、神がお与えになった働きをおろそかにしてしまうことになる。サタンは私達を沢山の分派へと分裂させ、混乱させるためにありとあらゆる教理の風を吹かせているのである。私達は現代の真理を取り扱う重要課題に心を向けなければならない。

● 聖書はキリストの先在性を述べている

聖書と証の書には、キリストの先在性についての明確な記述がいくつかある。まず、聖句から見てみることにする：

「ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる。」(イザヤ書9：6)

「御子については、『神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。』」(ヘブル1：8)

「しかしベツレヘムエフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわた

しのために出る。その出るのは昔から、いにしえ（永遠——欽定訳）の日からである。」（ミカ書5：2）

「今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者にして主なる神がこう仰せになる、『わたしはアルパであり、オメガである』。

・・・また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。・・・」（黙示録1：8、18）

● 「エホバ」の意味は？

「エホバ」という語は、今日ほとんどの聖書学者達によって、神を意味するヘブル語の誤訳であると考えられている。なぜなら、神の名はあまりにも神聖なものであったため、ユダヤ人達はその名を決して口にできなかったからである。その結果、正しい発音が分からなくなってしまったのである。最新の発見によると、正しい発音は恐らく「ヤーウェ」であったと信じられている。この語の意味を簡単に述べると「私は有る」となる。これは神が燃えるしばの中からモーセに告げられた名前である：

「神はまたモーセに言われた、『イスラエルの人々にこう言いなさい、『私は有る』というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました』」（出エジプト記3：16）

イエスは御自身について、次の言葉を用いられたことがある：

「イエスは彼らに言われた、『よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生まれる前からわたしはいる（有る——欽定訳）のである』。（ヨハネ8：58）

イエスはここで、御自分が常に存在する

お方であることを宣言しておられるのである。彼が存在しなかった時はかつてなかった。「私は有る」という言葉は、「私は有った」（過去形）とも「私は有るであろう」（未来形）とも違う。イエスは常に存在するお方なのである。

キリストの先在性についてエレン・ホワイトは次のように述べている：

「この世界はイエスによって造られ、できたもののうち、1つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ1：3）。キリストがすべての物を造られたのであれば、彼はすべての物が造られる前から存在していたことになる。これについて述べられている言葉は極めて明確であるため、誰にも疑いの余地がない。キリストは本質的に、かつ全面的に神であられた。彼は永遠の昔から神と共におられ、神はすべての物に勝って彼を永遠に祝福されたのである。」（セレクトッド・メッセージ1巻247ページ）

「キリストが天国の門の内側に入られたとき、彼は何百万もの御使達の中であって王位を授けられた。・・・戴冠式が行なわれた後、御霊が臨み、その時まさしくキリストに天の栄光が授けられたのである。その栄光はキリストが天父と共に永遠の昔から所有しておられたものである。」（ST、1899年5月17日）

「キリストは永遠の昔から天父と結合しておられた。彼が人性をお取りになったときも、尚天父と1つであられたのである。」（セレクトッド・メッセージ1巻228ページ）

上挙げた引用文は、キリストが「本質的にかつ全面的に神であられ」、「永遠の昔から神と共におられ、神はすべての物に勝って彼を永遠に祝福された」ことを明言している。それなのに、キリストが存在しな

かった時があったなどと、どうして考えることができるのだろうか。彼が造られたなどと、どうして考えることができるのだろうか。

● キリストは神であり人間であられた

聖書や証の書を読んでいると、他の文とは一見矛盾しているような箇所にも時折ぶつかることがある。イエスは「ひとり子」であったと書かれているが、このような文を上挙げた聖句や証の書の引用文と、どのように結びつけたらよいのだろうか。キリストが神からお生まれになったお方であるとしたら、彼が存在しなかった時期があったことになる。にもかかわらず、彼は永遠の昔から天父と共におられたというのだろうか。一体どういうことなのだろうか。

先へ進む前に、エレン・ホワイトの引用文をもう1つだけ読んでみよう。次のように書かれている：「人間キリスト・イエスは、全能の神ではなかった。・・・」。これはこれまで述べられてきた事とは完全に矛盾しているように思われる。キリストは全能の神でもないのに、どうやって神と1つになることができたのだろうか。イザヤはキリストのことを、「大能（全能）の神、とこしえの父」と呼んでいる。ここで挙げられた問題とは、そもそも何であるのか？

私達は、キリストが人であり神であられたことを覚えなければならない。神として、彼は永遠の昔から存在しておられた。人として、彼は父によって生まれ、肉の形で女から産まれた。人と神の両方であられたキリストを、私達は理解しなければならない。聖書や証の書がキリストの神性について述べているのか、人性について述べているのかを、私達は理解しなければならない。

キリストは人としてお生まれになった。キリストは神として永遠の昔から存在しておられた。この神性と人性の結合を私達が完全に理解するのは、はなはだ困難なことである。私達がすべてを理解するには、十分な啓示がなされていない。ある意味において、それは神秘であるともいえる。私達

はこの事を完全に理解することはできない。しかし、私達の救いにとって必要なものとして、神がお示しになった事柄は理解しなければならない。次のエレン・ホワイトの引用文をよく読んでいただきたい：

「キリストの受肉の奥義を説明できる者は誰もいない。それでも我々は、キリストが人としてこの世においでになり、人の内に住まれたことを知っている。人間キリスト・イエスは、全能の主なる神ではなかった。にもかかわらず、キリストと天父は1つであられた。カルバリーの苦悩の下であっても、彼の神格が消滅することはなかったが、『神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである』との言葉は真理である。」（5BC 1129, 1130）。

「しばらくの間キリストの神性の輝きは覆われ、彼がお取りになった人性によってさえぎられたが、それでも彼は人となられたときに、神であることをおやめになった訳ではなかった。人性が神性の代わりをつとめることはなく、神性が人性の代わりをつとめることもなかった。これは『神のようになる奥義』である。キリストの内における『人』と『神』という2つの表現法は、密接に調和していたが、それでもこれらは各々はっきりとした個性を備えていた。キリストは自らを低くされて人となられたが、その神格は尚も御自身の内に備えておられた。キリストが常に信仰を保ち、自らの戒めに忠誠を尽くされている間、彼の内から神性が失われることはなかった。悲しみや苦悩や背徳に困まれ、人々を救うために天から遣わされたにもかかわらず、その人々からさげすまれ拒まれたときでも、イエスは御自身のことを天における人の子として言い表された。地上での働きが終ると、彼は再び神性の栄光をまとわれることになっていたのである。」（5BC 1129）

● キリストのために用意された体

イエスは女から生まれ、すべての人と同じような体を持っておられた。お生まれになる以前は、持っておられなかった体である。この体は彼のために用意され、誕生の時に人となられたのである。ネブカデネザルの燃える炉の中に彼は人の形を取って現れた。彼はモーゼの前にも人の形で現れたことがあったが、実際に人となられたのは、2000年前彼がマリアと神によってこの地上にお生まれになったときであった。

「それだから、キリストがこの世にこられたとき、次のように言われた、『あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった』

。』（ヘブル10：5）

「永遠に渡ってイエスは、その手足に尚も釘跡の残っているお体をお持ちになるであろう。」（初代文集122、304、305；7BC 955 ページ参照）

「ヨハネは人の形を取られたキリストを見た。その手足には釘跡があり、それはいつまでも彼の栄光となるのである。今（黙示録1章の幻において）ヨハネは再びよみ返られた主を仰ぐことが許される。その身にまとわれた輝きは、人の目が見ても尚生きていることのできる程の輝きであった。」（7BC 955 ページ）■（砂川満 訳）

今、我々は準備されている！

克己と自己犠牲か、一般受けのする側か？

1. 「嵐が迫ってくるとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者がその信仰（立場〔英文〕）を捨てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合（妥協）し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般受けのする側を選ぶのである。（They are prepared to choose = 選ぶように準備される）。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き惑わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる」大下378

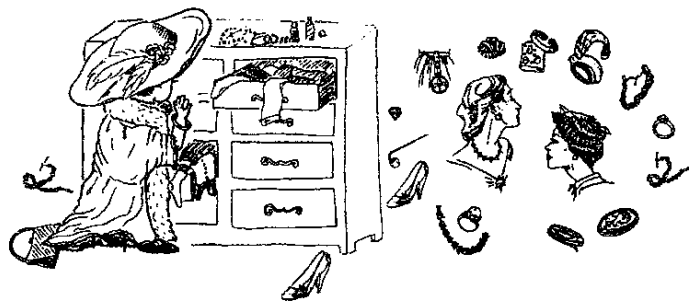
2. 「聖書の明らかで率直な真理を受け入れたくない人達は、自分の良心を鎮静するのに都合の良い作り話を絶えず求めるようになる。霊的でなく、へりくだって自己を犠牲にする必要のないような教理であればあるだけ、ますます一般からの受けはよいのである」大下267

3. 「過去半世紀の間に起こったリバイバルの多くには、将来大規模にあらわれるのと同じ勢力が、多少とも働いていた。そこには感情の興奮と真理と虚偽の混合が見られ、それは人を欺くのに好適なのである。しかし、誰も欺かれる必要はない。神の言葉に照らしてみるならば、これらの運動の本質を見定めることは難しいことではない。人々が聖書の証言をおろそかにし、克己と世俗の放棄とを要求する明解で人の心を試す真理から顔をそむけるならば、神の祝福を受けることができないのは確かである」大下191

宝石、装飾品を身につけるべきか

「最後のあがないの日」に住む神の民へのメッセージ

ロバート・ウィーランド



その人の魅力を増すと考えられているからである。

もし今日宝石、装飾品を身につけることを聖書がよしとしているなら、セブンスデー・アドベンチストにそれを禁じることは正当なことであろうか。なぜ、無邪気な習慣かもしれないこの楽しみを彼らから奪い取るのだろうか。不信心な世の中であって忠実なクリスチャンになろうとするものは、すでに十分な犠牲を払っているはずなのに、さらに不必要なものまで民に負わせることをするのだろうか。

つい最近まで、セブンスデー・アドベンチストは宝石、装飾品を身につけないという事に一致した考えを持っていた。しかし、今や、我々はアドベンチストの学者の間から装飾品を奨励するようなことをくり返し聞かされている。彼らは、セブンスデー・アドベンチストの宝石、装飾品を身につけてはならないという教えは非聖書的であり、それを立証しようとして使われている聖句は誤った解釈にもとずいているのだというのである。

もしこの宝石、装飾品を身につけるようにとの奨励が正しければ、セブンスデー・アドベンチストは、一世紀以上もまことしやかにだまされていたことになるのである。一方、それがもし正しくないとすれば、多

くの教会員、特に青年達は、大変な欺瞞に陥っていることになる。何かが正されなければならない。一世紀以上も信じてきたことが正しいのか、それともこの新しい教えが正しいのか。両方が正しいことは有り得ない。

一般的に言って、我が民は宝石、装飾品類を身につけてはならないとする立場を支持する聖句として次の3つの聖句をあげる

- ① Iテモテ 2:9「また、女はつつましい身なりをし、適度に慎み深く身を飾るべきであって、髪を編んだり、金や真珠をつけたり、高価な着物を着たりしてはいけない」
- ② Iペテロ 3:3,4「あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを、身につけるべきである。これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである」
- ③ イザヤ 3:16~26「主は言われた、シオンの娘らは高ぶり、首をのばしてあ

るき、目でこびをおくり、その行くとき気どって歩き、その足でりんりんと鳴り響かす」

その日、主は彼らの美しい装身具と服装すなわち、くるぶし輪、髪ひも、月形の飾り、耳輪、腕輪、顔おおい、頭飾り、すね飾り、飾り帯、香箱、守り袋、指輪、鼻輪、礼服、外套、肩掛、手さげ袋、薄織の上着、亜麻布の着物、帽子、被衣などを取り除かれる。

これらの聖句は何を言っているのでしょうか？

これらの聖句が宝石、装飾品を身につけることを禁じていると考えるのは不合理な事であろうか？これらの聖句は、髪に金、銀、真珠を編み込むような、今日は見られない、昔の習慣を主として禁じているのだろうか？

もしペテロの言葉をまじめに受け取るならば、いかなる衣服も着ることを禁じていると理解されていいだろうか？（彼が「金の飾りを身につけないように薦める」と言っている一方、「服装をととのえるような外面の飾りではなく」とも言っている。宝石、装飾品類支持者達は、もしペテロの言葉を引用して、彼が装飾品を禁じているとするなら、ヌード（裸体）もペテロは支持しているに違いないと主張する。こんな事を言うと笑いものになるであろうが、しかし、その冗談には宝石、装飾品反対の立場を馬鹿にした皮肉が含まれている。イザヤは耳輪を非難しているばかりでなく、「礼服」「鏡（英文）」「亜麻布の着物」「被衣（かずき）」（近代訳では「ショール」「外套」「手さげ袋＝財布」「香箱、」）も非難している。これらの物は何も悪くはないのだから、宝石、装飾品を身につけてはならないとの証拠としては貧弱であると言うのである。

もし宝石、装飾品を身につけることは贅沢（ぜいたく）、浪費という点から悪であるとするなら、近代のプラスチック製の装飾品に変えれば、問題は解決するだろうか。今頃は、模造品が行き渡っているから、だれも装飾品に大金を費やす必要はないであろう。

確かに、E. G ホワイトは宝石、装飾品類に反対である。しかし、その提唱者は、彼女は19世紀のビクトリア時代の人で、古臭いメソジストに近かったのだ、と言う。

では、宝石、装飾品類を身につけることはどうしていけないのか？

どんな宝石、装飾品類を身につけることにも賛同はしないペテロはヌードイズム（裸体主義）に賛同しているという議論は、ギリシャ語の言語を検討すると崩れてしまう。彼は慎み深く着ることを非難しているのではない。彼は見せびらかし、見栄を張る衣装に反対しているのである。彼は、自分に注目を引きつけようとするな着方に対して言っているのである。これは謙遜と柔和をもってキリストに従おうとする者にとっては、誰であってもよろしくないことである。すべての誇りを塵に伏させる十字架をありがたく思う者にとって、そういうことはできないはずである。こうした光に照らしてみると、ペテロの勧告は宝石、装飾品類を身につけることに確かに反対している。「髪を編み」とペテロが言っていることも常識を使えばよく分かることである。彼は、見栄を張るような、手の込んだヘーヤスタイルの事を言っているのである。

「金や真珠」がヘーヤスタイルだけについて言われているという証拠は何もない。ただ、「金の飾りをつけ」と言っているとおりである。

イザヤの預言で、飾り物を「取り除く」

言っているのは、背教した「シオン」の女達によって過度の空しいこと、また個人的な傲慢を譴責しているにすぎない。主は、宝石、装飾品類であろうと、衣服であろうと、それが自己表現として、他人を自分に引きつけようとして、人工的な装飾に自己を没頭させることを忌み嫌われるのである。主が承認されないのは「ひどくめかす」着こなし方である。なぜならそれは天で起こったルシファーの最初の罪、またエデンで人間に起こったプライド（誇り）に戻るからである。これらの聖句の意図していることは、自分の肉体的美しさ、衣服の過度な関心を超越した、ほんとうの自己尊重、自尊心に目覚めさせることである。

パウロが「適度に慎み深く身を飾るべき」と言っているのは、すなわち、キリストを信じる女性は、性的注目を引き寄せるような着方はしないということである。救い主との交わりの喜びが生活に溢れ出るときに、自我が関心の的となることは止むのである。

本当の着こなし方の原則

これらの聖句を注意深く研究すると、ただ単に宝石、装飾品類を取り除くということ以上の事を意味していることが分かる。パウロとペテロは、自分に注目を寄せないような衣服には賛同しているのである。あなたが、ある婦人に会って、そして後になって、その人はどんな衣服を着ていたかと聞かれたとする。「全然覚えていませんね。彼女が何を着ていたか覚えていません。ただ彼女の顔は輝いて、幸福で親切でした」と言えるなら、それこそ「わたしでなく、キリスト」ということの実践であろう。これこそ、キリストにあるセブンスデー・アドベンチストにあるべき「衣服改革」の本質であろう。

聖句に見られるバランスの取れた考え方に到達しようと思うなら、控え目に、いわゆるシックな「上品な良い趣味－高級趣味」

のイヤリング、ネックレス、指輪、ブレスレットなどは身につけていいのだろうか。

ではその答えを見つけることにしよう。そのためには、もう一つの真理、つまり最近のセブンスデー・アドベンチストにほとんど見失われつつある真理－の面から考察してみる必要がある。その真理とは、ポンペイや、ヘルクラニウムがヴェシヴィオ山の灰の中に埋まっていたように、アドベンチストの数世代にわたって覆い隠されてきたと思われる真理である。それは我々の先駆者達が188年に提示された天の聖所の清めと信仰による義認のユニークなつながりを持つ真理である。

これを聞いてある人は驚くであろうが、古代イスラエル人は、主が承認されたわけではなかったが普段は酒類を適度に飲んでいたことは明らかである。（レビ10：1、9；サムエル上25：36参照）。しかし、あがないの日には一滴たりとも飲まなかったのである。同じように、彼らは、普段は宝石、装飾品類も、特別な機会を除いては、身につけていたのである（後程述べる）。しかし、あがないの日にはそうしなかった。この特別な日は、「聖会を開き、身を悩ます」ように言われた日であった。（レビ23：27）。この命令は幾度も繰り返されている。

どのように「身を悩ます」か？

自責と荒布で身体を懲らしめることではない。それは「自らを卑下する、」（イザヤ31：4）ことであり、ダニエルのように「身を悩ます」（ダニエル10：12）、「自分自身をへりくだらせる」ことである。（詩篇35：13）。それには自己否定の食事、あがないの日に断食することさえ含まれていた。単純な着物を着る衣服改革、飾り物を取り除くことも含まれていた。

この事は幾つかの聖句によって明らかにされる。預言でキリストは彼の「断食」を単純な衣と結び付けている。(詩篇69:10、11; 35:13) 霊的な重要な機会には、神の民は、断食して、普段の衣服を脱いで、「荒布」を身にまとったのである。それは山羊や、らくだの毛、色は黒っぽい、粗野な材料で織られたものであった。それを着ることは特別にへりくだること、主の哀れみを乞う事を表していた。(創世紀37:34)。アハブが悔いたとき、断食して、荒布を着たのであった。(1列王21:27)。神は祭司-牧師達に、イスラエルに特別な危機が臨んだときに断食してへりくだった服装をするように命じられたのであった(ヨエル1:13)。異邦人でさえ、特別な悔い改めの時にはどうしたらいいか分かっていた。ニネベの人々についてこう書かれている:

「そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。また王とその大臣の布告をもって、ニネベ中にふれさせて言った、『人も獣も牛も羊もみな、何を味わってはならない。物を食ひ、水を飲んではならない』」ヨナ3:5~7。

この特別な悔い改め、心を深く探るべき時に特別に宝石、装飾品類を取り除く必要があったことが明らかである。ホレブ山で主はイスラエル人に言われた:

「ゆえに、今、あなたがたの飾りを身から取り去りなさい。そうすればわたしはあなたがたになすべきことを知るであろう」。出エジプト33:4~6。ヘブル語では明らかに宝石、装飾品類である。

このように年二一度のあがないの日こそ神の民は、断食し、酒類は一切断ったばかりでなく、

宝石、装飾品類のない単純な服装をしたという事の証拠が優勢であることを表している。彼らの生活様式は、大祭司が最も厳粛な働きのために至聖所に入っていくときに、彼らも信仰によって厳粛に従っていかなければならないという事実に基づきわしかった。これは臆病な自己中心的な恐れによって動機づけられるものではなかった。国民全体を代表して大事な、厳粛な働きをする大祭司に一大関心を集中させていたからであった。

我々は実態のあがないの日に住んでいる。キリストは我々の大祭司として今や天の聖所の清めに携わっておられる。古代イスラエルが特別な儀式にふさわしい特別な義務を果たしたように、今日の神の民はこの実態のあがないの日にふさわしい特別な義務がある。セブンスデー・アドベンチストの健康改革、衣服改革のメッセージは、この天のあがないの日のユニークな理解から生まれ出てきたものである。

我々は今、完全に断食をするということは出来ない。食物がなければ生命を維持していくことはできないからである。しかし、歴史のどの時代よりも、救い主はこの我々の時代に、1844年以後、特別に次ぎのように勧告を与えておられる:

「あなたがたが放縦や(グルメやたとい良い食べ物の食べ過ぎであってもそれに耽溺すること)、泥酔や(肉体的、精神的敏感さを弱めるものの使用)、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕らえることがないように、よく注意しなさい」ルカ 21:34。

ポイントは、今や我々は生きるために食べるのであって、食べるために生きる時ではないということだ。健康改革の真の動機は、自己中心的なものではない。自分の生活をよりよいものにしようとするのでなく、

また自分の楽しみのためにもう少し数年命を延ばそうという考えであってもならない。我々の動機は我々のあがないの主の誉れと栄光のために生きることである。また主の特別な働きに調和し、主の御霊の働きに敏感に反応するため、肉体的に、知的に、霊的に、我々自身を最高の状態に保つためであり、世に最後のより良い奉仕ができるためなのである。

同じ様に、アドベンチストの衣服改革も、最後のあがないの日の働きをしておられる天の大祭司と協力するという考えから生まれてきたものである。特別な意味で、神の民は自分自身でなく、大祭司に思いを集中すべきときなのである。動機は恐れでなく、一つの民として関心を集中すべきことはキリストの最後のお働きの成功のためということである。十字架と救い主の犠牲を更に明確に深く理解することは、我々を世の空しいことから救うのである。

世界歴史においてかつてなかった、最も素晴らしい良き訪れは、自我という暴君との戦い、からみつきから開放される絶交のチャンスが来たということである。最後の時代の神の民は、最も幸福で、プライド（誇り）、官能〔肉欲〕的な生き方、物質主義から自由にされ、世界がかつて見たことのない最も無我な人間にされるのである。

彼らの健康、衣服改革は、自己生活改善プログラムでもなければ、難行苦行でもない。キリストとの内なる交わりの、主にすべてを専念、没頭していることの「印」である。自分自身を飾ったり、食欲に耽溺したりすることよりもっと素晴らしい、興奮すべきことを発見したことの表われである。（ところで、宝石、装飾品類と同じように除外しているものがある。それは現代の極端で、みすばらしい、魅力のない1890年代の、ある人達は特別な主との「関係」を持つという人目を引くような衣服である。

それはまたもう一方の自己主張である。真の衣服改革は、きちんとした、それでいてひかえめな、センスのある趣味というバランスが必要である)

一度宝石、装飾品類等のようなものに金を使いたすと、利己的な贅沢にはきりがなくなる。宝石、装飾品類は、「隣人に負けないように見栄を張る」最大の道楽である。更に高い宝石、装飾品類を買って誰かに愛を表現しようとするのは哀れである。

「金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている」（ヤコブ 5:3）と主は言われる。金をどのように使ったか、全てが清算される時はそう遠くはない。主はその日の恥辱から我々を救おうと訴えておられる。

プラスチックの模倣品についてはどうか？

それらは本物への欲を作り出すのである。またあがないの日にキリストが訴えておられる生き方を否定することになる。それは同じ様に利己的なプライド（誇り）にかかり合う事になる。

E. G. ホワイトは、衣服改革と聖所の清めのつながりをご覧になった。あがないの日の奉仕と1888年の、信仰による義認の特別なメッセージとのつながりを見て非常に喜ばれた。（1890年のレビュー一誌、最初の4ヶ月の記事を見られよ）。

彼女の教会への絶えざる関心（憂慮）は、「我々の信仰の土台である天の聖所における奉仕の正しい理解」であった。信者は「この時代において必要な信仰を働かし、神が彼らに占めさせようとしておられる立場」を占める事ができるようでなければなら

ない。(大下222、EV221, 222)。だから彼女は次のように言われたのである：
「単純に着ること(つまり、自分に注目を寄せるのでなく)いかなる種類の宝石、装飾品類の見せびらかしを避けることが我々の信仰に似つかわしい」(3T366)。

フランシス・ハバガールは、まだ改心しない、不幸な家族を5日間訪問することになった。その家族がキリストを知るようにと祈った。いよいよその家族と別れるときになった。彼女の祈りが聞かれたので、感謝の詩を書いた。「きみなるイエスよ、汚れしわれを」がそれであった(さんびか39)。

4年後に、彼女は再びその詩を読んだ。すると「こがねしろがね、知恵も力も献げまつれば、みな取り用い、我の心を宝座と

なして、み旨のままに治めたまえや」との行に来てびっくりした。そしてその友に手紙を書いた：「今、わたしのすべての飾り物を教会伝道部に送ります(伯爵婦人の持つような装飾品箱も含めて)。

フランシスは天のあがないの日について全然知らなかった。しかし、キリストの愛(アガペー)が彼女の宝石、装飾品類を捨てる動機になっていた。真理を知っている我々は、それ以下であっていいだろうか？

「栄えの主イエスの、十字架を仰げば、世の富誉れは、塵にぞ等しき」

アイザック・ワッツ

Adventism Triumphant, volume2, number2より■

さばきの厳粛さ

「さばきの時には、すべての才能の用途がくわしく調べられる。我々は、天から貸し与えられた資本をどのように用いたであろうか。主は、来られるときに、ご自分のものを利子と共にお受けになるであろうか。我々は、肉体的、精神的、知的に託された力を利用して、神に栄光を帰し、世界に祝福をもたらしたであろうか。我々は、時間筆、声、金銭、影響力などを、どのように用いたであろうか。貧しい人、苦しんでいる人、孤児や寡婦を助けて、キリストのために何をしてきたであろうか。神は我々を、神のみ言葉の保管者となさった。そして我々は、救いに至る知識を人々に伝えるために、我々に与えられた光と真理を、どのようにしてきたであろうか。キリストを信じるとただ表明するだけでは何の価値もない。行為にあらわされた愛だけが本物とみなされる。神の目の前で、行為を勝ちあるものにするのは、愛だけである。愛によって行われたことは、人間がどんなに低く評価しようとも、神に受け入れられ、報われるのである。

人々の隠れた利己心が、天の書の中であらわにされている。同胞に対して義務を怠ったことが記録され、救い主の要求を忘れたことが記録されている。キリストに属する時間、思想、能力を、何とたびたびサタンに与えたかを、彼らはそこに見るのである。天使が天にたずさえていく記録は、実に悲しいものである。キリストの弟子であると称する英知ある人間が、世的財産の蓄積や、地上の快樂の追求に没頭している。金銭、時間、能力は、虚飾と放縱の犠牲になっている。しかし、祈りや聖書研究にあてられる時間、魂へのへりくだりと罪の告白にあてられる時間は、ほとんどないのである」大下220～221。

ローマの世界制覇

-その3-

「終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め、国々にはいって行って、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。彼はまた美しい国にはいります。また彼によって、多くの者が滅ぼされます。しかし、エドム、モアブ、アンモンびとらのうちのおもな者は、彼の手から救われましょう。彼は国々にその手を伸ばし、エジプトの地も免れません。彼は金銀の財宝と、エジプトのすべての宝物を支配し、リビヤびと、エチオピアびとは、彼のあとに従います。しかし東と北からの知らせが彼を驚かし、彼は多くの人を滅ぼし絶やそうと、大いなる怒りをもって出て行きます。彼は海と美しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょう。しかし、彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう」ダニエル書 11:40~45

ローマ法王教、共産諸国を制覇

ここに我々は、「終わりの時」に北の王＝ローマ法王教が世界を制覇していくのを見ることができる。世界支配を陰謀しているのはローマ法王教であることをしっかりと把握していなければ、我々は第三天使を世に伝えることができない。ダニエル書、黙示録、預言の霊＝証の書はこの点ではっきりと一致している。ダニエル11:40~45、黙示録13章、17章、大争闘下35章。

「この教会（ローマ教会）① 再び世界を支配するために、② また迫害を復活させるために、③ またプロテスタントが行った全ての事を無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている」大下321。

「終わりの時」になって、「北の王」＝ローマ教会に挑戦してきたのは、「南の王」＝サタンの無神論権力であったことは学ん

だ。共産主義国はローマの「自由化戦略」で崩壊した。しかし、忘れてならないことは、無神論、理性主義イデオロギーは、崩れたのではない。ローマはそれをも飲み込んで、それと共同作戦で世界支配をねらうのであろう。なぜなら、E. Gホワイトは、教育269に次のように書いているからである：

「フランス革命を引き起こしたのと同じ教えの世界的広がり、――こうしたすべての事が、フランスを揺り動かしたのと同様の騒乱に全世界を巻き込むであろう」

フランス革命を引き起こした教えは、理性主義、神ぬきの自由、平等、博愛、無神論だ。それは、西欧諸国、全世界、民族、宗派、キリスト教を問わず、どこにも浸透しているのである。アメリカにも、そして、セブンスデー・アドベンチストにも。

11:40「終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め」

み使いはここで、古代バビロンについて書いたエレミヤの言葉を借りている。

エレミヤ書 4:13, 「見よ、彼は雲のように上ってくる。その戦車はつむじ風のように、その馬はわしの飛ぶよりも速い。ああ、われわれはわざわいだ、われわれは滅ぼされる」

イザヤもバビロンの力は戦車、馬、船にあると言っている。(イザヤ43:14, 17) これによっても、古代バビロンの型である大なる、神秘的なバビロン(ローマ、カトリック)は、北の王であることが分かる。戦車と騎兵と多くの船は、世界制覇のいろいろな戦略を意味するのである。

終わりの時にローマがどれほど速やかにその力を回復して世界的な力にのし上がってくるかという事を預言は明確にしている。黙示録にはローマはどのように失った支配権を回復するかということをもっとはっきり描写している。黙示録13章は、1798年にフランス軍によってローマ法王が虜にされたとき、「致命的な傷」を受けることをまず描写して、それからどのようにその致命的な傷が癒されるかを描いている。2つの小羊のような角を持つ獣で表されているプロテスタント・アメリカが、不法の者=罪の人(英文)の支配力を回復するのである(5T712)。

「ローマ教会は、その権力を再び確立して、失われた至上権を回復することをねらっているのである。．．．自分が手を下すときが来たら自分自身の目的を押し進めるために、教会は、ひそかに、そして怪しまれないように、勢力を延ばしつつある」大下340、341。

黙示録は、ローマの再起は、軍隊の征服によることは指し示していないが、ダニエル11:40は、バビロンがエジプトに対

して軍隊による攻撃を行って征服をしていたように、北の王=ローマ法王教は、その戦略を持って南の王=無神論権力=共産主義諸国を攻撃することを示唆している。しかし、エジプト=無神論権力に対する本当の戦いはイデオロギー的なものであり、預言によると法王教は何らかの方法で、この世界の反神的勢力に対してにわか攻撃を加えてくるというのである。それは、政治、経済、宗教戦略を意味するのではなかろうか？

「バチカンの秘密」の著者、赤間剛氏はその見解を次のように表している：

「世界最大の教団、バチカンの秘密戦略—政治、経済、宗教を通じて人類の未来を支配する。『最少にして最大の国家』といわれるバチカン(ローマ教皇庁)。世界中に無数の信者を有し、金融大本山といわれるほどの巨大な財源を持つバチカンの力は、世界政治において無視することが不可能である。バチカンの国際政治力は、日本人には想像もつかないほど強大なのだ。世界中で展開されているバチカンの政治・宗教戦略は、人知を越えた秘義をそのバックボーンにしている。」トワイライトゾーン、1984、12月号。

「バチカンの世界戦略とは何か。これがわからないと、教皇の行動や言葉の真の意味は把握できない。．．．要約していうと、それは、キリスト教のエキュメニカル(教会一致)戦略、更に諸宗教との連合戦略、無神論との対話と対決の戦略である」

彼は又次のようにも言っている。「宗教は政治を変えることができる！势力的に世界中をかけ回り、人々のハートをつかんでしまうローマ教皇、ヨハネ・パウロ2世。世界を旅する教皇の行状は、マスコミなどでは甘い感傷のベールに包まれて報じられる。しかし、バチカンの政治、悪くいうと謀略性は超一流である」教皇はどこへ行っ

ても、平和、愛、自由、平等、人権尊重を説教している。国際緊張の発火点の諸国を回りながら、「微細にみると高度に政治的だ」という。「ローマ教皇の言葉は一見甘くて理想的にひびくが、それだけにかえて、政治性ぬきの『バチカンへの美化』が強まるという、抜目ないハイレベル戦略に裏うちされているのだ」。彼はソ連、東欧諸国の共産主義一党独裁が崩壊する何年も前に「世界のすべての宗教勢力が手を結べば、ソ連の政治体制も『自由化』できると書いた。1989年の暮れに我々はそれを目撃した。赤間氏は、1989年暮れについて崩壊したソ連大國始め、東欧諸国の自由化を、その起こる10年ほど前にバチカンの共産諸国打倒の戦略と言い切った。

エジプト－無神論諸国だけでなく、「国々に入る」のである。

「国々にはいって行って、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう」

北の王－ローマの活動のいかなるものを正しく捉えようと思うなら、昔、北の王がにわかに南に押し迫り、エジプトの国を陥落したことを想像してみたらいい。バビロンが南に進軍したときに、国々を陥れたことは、洪水で川が氾濫するようであった。パレスチナも含まれた。（10節－その子らはまた憤激して、あまたの大軍を集め、進んで行って、みなぎりあふれ、通り過ぎるが、また行ってその城に攻め寄せるでしょう）。ヒゼキヤの時代に、アッシリヤが南に進軍してきたことは、終わりの時の北の王の戦いのタイプ（型）である。ダニエル11：40節に描かれている最後の戦いは、イザヤの言葉を繰り返しているように思える：

「それゆえ見よ、主は勢いたけく、みなぎりわたる大川の水を彼らにむかってせき入れられる。これはアッシリヤの王と、その

もろもろの威勢とであって、そのすべての支流にはびこり、すべての岸を越え、ユダに流れ入り、あふれみなぎって、首にまで及ぶ。インマヌエルよ、その広げた翼はあまねく、あなたの国に満ちわたる」イザヤ 8：7, 8。

こうしてソ連－共産主義の、無神論の国－はローマの自由化政策、戦略によって、陥落されたばかりでなく、他の東欧諸国が次々に自由化の波に飲まれてしまった。今やローマの戦略「国際化、新しい世界秩序構築、自由化、平等化、博愛化」の波は、あらゆる文化、民族、宗教の堤防を崩しつつある。今盛んに言われている世界の「ボーダレス」は、実は「全ての道はローマに通ず」ということの別の表現である。（ボーダレス＝境界線なしの意）。世界支配陰謀者の企みを塗り変えた美しい言葉として人々には聞こえているだろうが、すべての人類をローマの奴隷にしようとする掛け声なのだ。プロテスタント諸教会のローマとのつながりはもう引き返せないものになってしまった。

ローマの世界支配戦略とは何か？

その1－政治政策：

「新しい世界秩序」構築－これは、ブッシュ大統領が叫びだしたようであるが、実はそれはバチカン＝ローマカトリックの狙いなのであり、その言葉自体もローマからすでに出ていたのである。

黙示録 17：2、地の王たちはこの女と姦淫を行い、地に住む人々はこの女の姦淫のぶどう酒に酔いしれている」。

「自由化」「平等」「博愛」「人権擁護」のスローガンで政治家たちは、ボーダレスの世界政府樹立のために躍らされている。「欧米のマスコミでは、教皇を『国際政治の最大の仕掛け人』（ルモンド）とみたり、

『世界の指導者』（ニューヨーク・タイムズ）として扱っている」アメリカの復讐（赤間剛） p120。

その2 - 経済政策：

「世界最大の財閥」「金融大本山」バチカン、富の平等化、後進国に分配せよと主張する。核兵器と通常兵器の削減をし、世界の貧しい人々に対する援助を増大せよと演説して、第三世界、発展途上国の民衆の心を捉えているのである。（同情p128）。

今世界のどこの国も赤字財政であるという。国々を赤字にすれば支配するのにた易いというのだろうか？大恐慌論者の宇野正美氏は次のように言っている：

「大恐慌は世界支配のための手段であることを忘れないでいただきたい。世界の人々が危機に陥り、わらにもすがる思いで世界政府を受け入れるという状況が作り出される」

ダニエル書 11:43「彼は金銀の財宝と、エジプトのすべての宝物を支配し、リビヤびと、エチオピアびとは、彼のあとに従います」

エジプトは預言的、靈的解釈で、E. G. ホワイトは「サタンの無神論」と言っている（大上344～5）。「不信と反抗の精神を表す」、つまり、神に反抗的な勢力の財宝と宝物を全て支配するのは「北の王」＝バチカンである。リビヤ、エチオピアは、エジプトの仲間である。エジプトが今日の共産主義とするならば、黙示録で、神と小羊に反抗して、神の民を迫害する勢力は、プロテスタント・アメリカであり（黙13章）、ヨーロッパ共同体なのだろうか（黙17章）。

いずれにしても、巨大ユダヤ財閥ーロス

チャイルド、ロックフェラー帝国、金とダイヤモンドを支配するオープンハイマー、「究極の兵器」食糧を支配するカーギル、世界最強の金融帝国モルガン、国際ユダヤー多国籍企業、イルミナチーフリーメーソン...すべての金融を支配するに至るのであろう。

黙示録 18:3「すべての国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによって富を得たからである」。

バチカンの資産は天文学的数字にのぼると言われている。

「バチカンについては未知なることが多いが、その財政のカラクリほどわからないものはない。その原因については種々あるが、もっとも大きな原因はバチカンの異常なまでの守秘性であろう」聖域バチカン銀行 渡部泰輔 P84。

その3 - 宗教政策：

宗教大連合に向けて、キリスト教会一致運動と言われるエキュメニカル戦略、更に諸宗教との連合戦略のために世界宗教平和会議、世界宗教者倫理会議を作り出した。

カトリックは昔はそうであったが、今は違う？

SDAのウェイトレスがレストランのお客さんにと話しが進んでいるうちに、カトリックの話しになったそう。そのお客さんがたまたまカトリックであつたらしく怒って「昔はそうであったが、今はカトリックは違う」と言ったそう。

大下328～330「しかし、教会は変わっていない。過去に存在した法王制のあらゆる原則は、今日も保存されている。...

自分の目的を達成するのに最も都合の良い性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はヘビのような不変の毒を隠している」

「大多数の者は、法王制に対して好意を持っていない人達でさえ、この教会の権力と影響から来る危険をほとんど理解していない。多くの者は、中世をおおっていた知的道徳的暗黒は、法王制の教義、迷信、圧制を広げるのに役立ったが、現代の知性や、知識の普及、また宗教問題に関する自由の増大は、不寛容や専制政治の復興を押しとどめている、と主張する。この文明の時代にそのような自体が存在するというような考え方は、嘲笑される。知的、道徳的、宗教的な大きな光がこの時代に輝いていると

いうことは事実である。神の聖なるみ言葉が開かれて、天よりの光が世界を照らしてきた。しかし、いっそう大きな光が与えられれば、与えられるほど、それを曲解し、拒む者の暗黒はますますひどくなるということをおぼえてはならない」

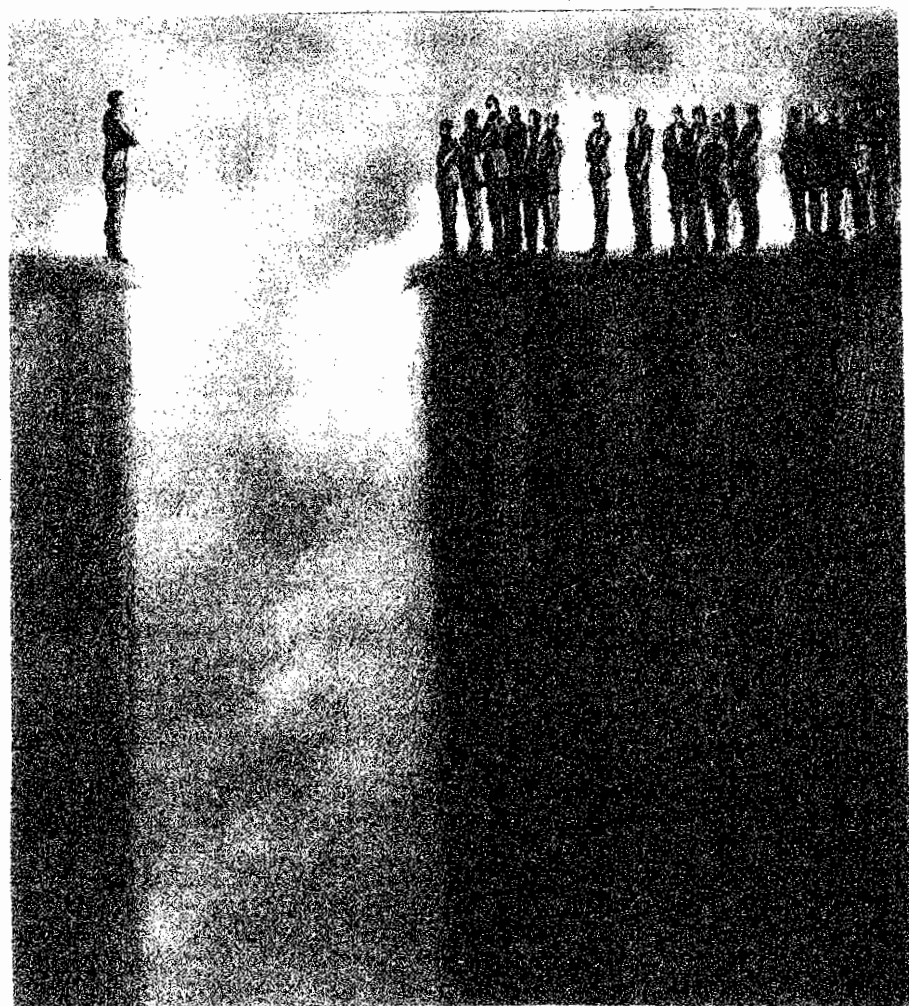
よくよく覚えておきたい！ローマのターゲットは「美しい国」セブンスデー・アドベンチストであることを！

大下258「この大欺瞞者が最も恐れていることは、我々が彼の策略を見破ることである」「... サタンの力を知らない者の心は実にたやすくサタンに支配されるからである」



揺らぐヨーロッパ共同体

ダニエル2章の預言と黙示録17章の預言はどう調和させるか？



ヨーロッパ共同体は最初フランスから提案されたものであった。1950年、フランスの経済学者で、しかも熱心なカトリック信者であったジーン・モーネの考案したものであった。ミッテラン・フランス大統領によって養育され、フランスのドロール委員長によって引率されている。

かつてのヨーロッパ経済共同体の委員長であった、ワルター・ホルスタインも言った：「決して間違っていないことは、我々は政治をしているということだ。我々は

ヨーロッパ合衆国をうち建てるのだ」

黙示録17章は旧世界に、法王教がもう一度復興されることを預言している。

黙示録 17:12, あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。

黙示録 17:13, 彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える。

ダニエル2章、7章に、10の角はローマ

から分裂したヨーロッパの国々であることが描かれている。暗黒時代と言われている1260年の間、ヨーロッパは彼らの力をローマ・カトリック教会に与えて、支持していた。彼らは「聖ローマ帝国」と呼んでいた。しかし、1798年にその共同体が崩壊して、もはや法王制を支持しなくなった。だから、ヨハネは荒野に冠のない10の角を持つ獣を見たのである。その獣は「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがてそこ知れぬところから上ってくる」ものである。その獣はかつてヨーロッパの政治、経済、宗教を支配していた。法王教の政治的権力を表す「獣」である。ヨーロッパは一つの目的のために統合するであろう。なぜなら、預言では「獣と共に一時だけ王としての権威を受ける。彼らは心を一つにしている」とあるからである。

しかし、ダニエル2章によると、分裂したヨーロッパ諸国は、「鉄と粘土が相混じらないように、かれとこれと相合することはありません」と書いているのではないか。ヨーロッパ統合は成り立たないというかもしれない。黙示録17章と、ダニエル2章とどのように調和させたらいいのだろうか？

確かに、ヨーロッパのある国々は、大國ドイツの台頭の恐れ、独自の国を失いたくない気持ち、民族問題、宗教問題、... 「鉄と粘土の」-「強い国と弱い国」のヨーロッパには不安の要因が多くある。

デンマークは今年6月の国民投票で、マーストリヒト条約の批准を否決した。つまり、国民はヨーロッパ統合に反対の意を表明したのである。1992年、今年12月の末にヨーロッパ共同体が批准される方向に動いていたヨーロッパに、危うい動きが生じたことが報道された。そして最もEC（ヨーロッパ統合）を推進していたフランスに反対派が増えてきて、9月20日の投

票日に反対派が勝てば、期待のヨーロッパ共同体の実現は、また遠退くのではないかと、世界の人々、指導者たちは、固唾を呑む思いでフランスの決定を見守っていた。特に、アメリカでは、世界各国の経済を調整する、各国中央銀行頭取、大蔵大臣たちが集まっていた。しかし、ついにかろうじて、賛成派の勝利と決まった。賛成1308万票、反対1259万票でわずかの差で可決された。イギリスでも反対は相当数に上ると言われている。いよいよヨーロッパ統合への足並みが乱れたことを表している。

ヨーロッパ統合は、聖書の預言の光で照らしてみたら成り立つのか、成り立たないのか？どんな考え方ができるだろうか？

1. 予定されていたとおり、今年12月に成就する。不安材料を持ったまま、無理してでも、サタンの力が働いてヨーロッパ統合が成り立つか。カトリックのねらっているのはそれであり、ヨーロッパの礎はカトリックと言われているほどその影響力は強くなっている。「旋風のように」あおり立てて予定されているその日に成り立つ可能性は考えられる。またソ連、東欧諸国の激変のようなことを目撃するかもしれない。ゴルバチョフの率いるソ連の自由化も保守派によって阻止されるように思われたが、結局は、世界化、自由化政策によってその大國の城壁は崩壊したのであった。ヨーロッパ共同体への阻止要因は多くあるが、世界政府への道に踏み切るであろう。

2. 不安要因が多くて、予定された日には成就せず、また延期の可能性がある。2車線にする考えも出ている。つまり、用意のできている国々が先にECにゴールインし、スピードの遅い国は後で加入するとしてもいいのではないかと。

3. ダニエル2章の預言によると、鉄と粘

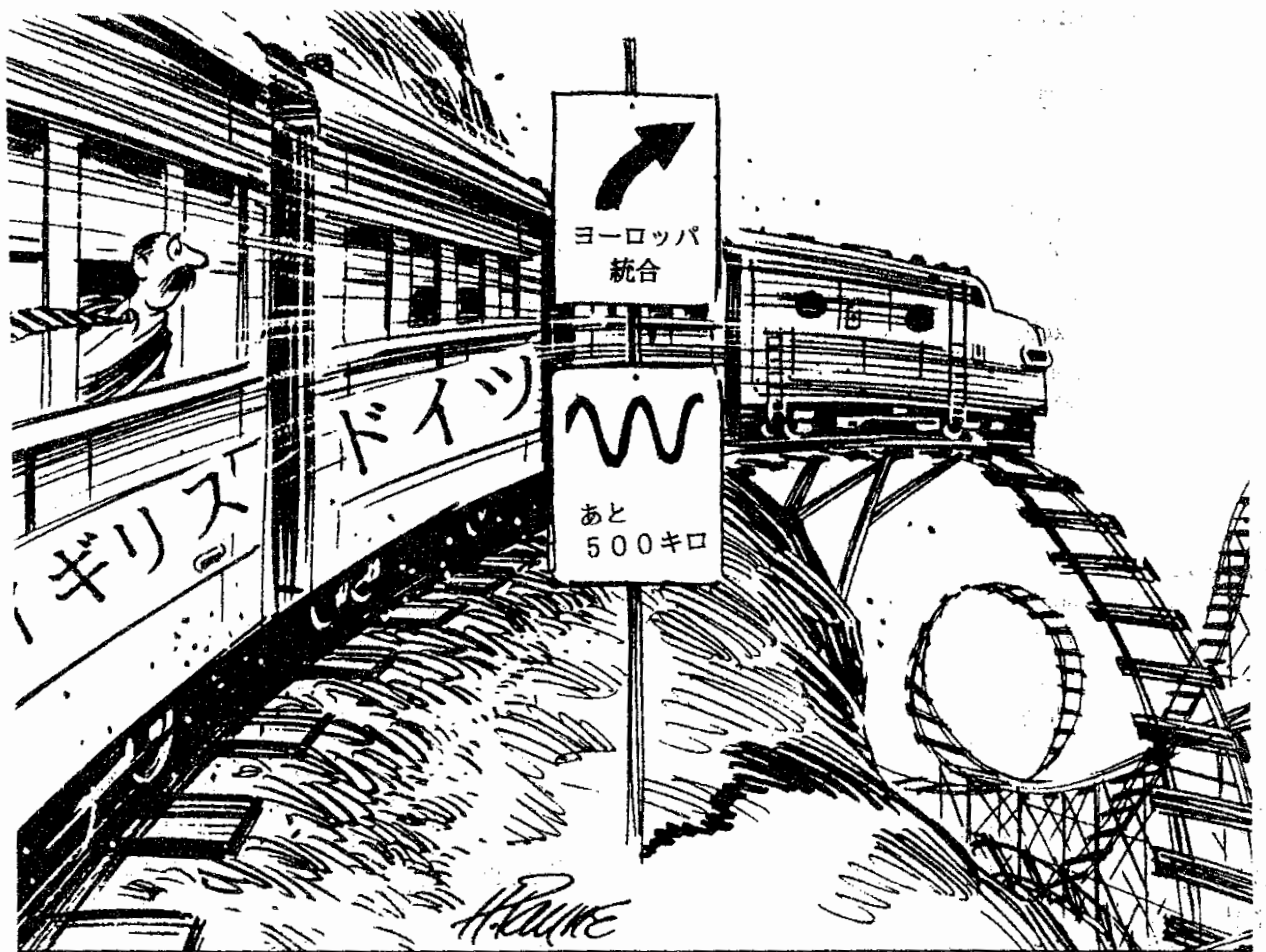
土の分裂したヨーロッパは統合することは決してない。

4. 「新しい世界秩序構築」を狙っているバチカンとアメリカは、もう時期が来たと見て、どんな手を廻すか分からない。先ずはヨーロッパ共同体を作ることに応援するだろう。次の狙いはアメリカが龍のように語り、世界がバチカン-ローマの支配権にゆだねるようにその権力を働かせることが突然起こる可能性がある。

中国も「新しい世界秩序構築」に経済面から動きだしている。「新しい世界秩序構築」に向かって動いていることにいささかの疑いもない。聖書の預言もはっきりそう言っ

ている。わたしは、今年12月に必ずヨーロッパ共同体は成るとはドグマチック（独断的）に言えないが、誓い将来それが、黙示録17章の預言の成就として起こることは信じている。ただし、「一時のだけ」である。

今日のヨーロッパの混乱要因を見ると、またここで、聖書の「彼らが心を一つにする」ことが、一時の間であることの驚くべき預言に驚くのである。それは、「短期間」という意味である。ある人は、「一日は一年」という預言的な解釈を適用する人もある。■



質問と答え

次の聖句の意味を教えてください。

「キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。こうして、彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった」 Iペテロ 3:18, 19, 20

この聖句は多くの人々によって曲解されている。どんなふうによつて、キリストは実際に十字架で死なれてから、煉獄かどこかに下って行って失われている魂に福音を宣べ伝えるに行かれたというのである。この考え方は、聖句が実際に言っていることとは全く違っている。ではよく見て、これらの聖句のいわんとするメッセージをつかんでみよう。

1. まず気を付けないことは、キリストは、獄に囚われている霊どもにどのように宣べ伝えられたかということである。「霊によって生かされた」というのは、英文では「by the Spirit」と大文字になっている。つまり、キリストは聖霊によって復活されたのである。

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように、そして、あなたがたが神に召されている望みがどんなものであるか、聖徒たちがつぐべき神の国がいかに栄光に富んだものであるか、また、神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたがたが知るに至るように、と祈っている。神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、...」エペ

ソ1:17~20。

「その力」とは聖霊のことである。キリストはご自分を復活させたところの聖霊によって、ノアの時代の人々に福音を伝えられたのである。

「この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである」Iペテロ1:10~11。

預言者ノアに働いたキリストの霊=聖霊によって宣べ伝えられたのであった。

そのことを頭において、次のことを考えてみよう。

2. 「では、その福音宣伝はいつなされたのか？」ということである。答えは明瞭。20節に「むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。」と言われている。洪水前の人々に、箱船が作られている間に福音が伝えられたのである。

3. 次の質問を考えてみよう：「福音は誰に伝えられたのか？」ということ。「獄

にいる霊ども」と言っている。この言葉の使い方は、聖書を通じて罪のとりこ、獄屋、ひとや(牢屋)のことを表している。

詩篇 142:7「わたしをひとやから出し、み名に感謝させてください。あなたが豊かにわたしをあしらわれるので、正しい人々はわたしのまわりに集まるでしょう」。

イザヤ 42:7、「盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる」イザヤ 61:1, ローマ 7:23, 24参照。

4. ではもう一つ。「霊ども」とは何か？ギリシャ語では「pneumata」-ニューマタという。「pneuma」-ニューマの複数である。ニューマは簡単に「人」をいう。私の「霊」とか、あなたの「霊」とか、わたしたちの「霊」という使い方がよく聖書にある。1コリント16:18、ガラテヤ6:18、2テモテ4:22、ピリピ4:23、ロマ8:16。人の霊というものは確かに存在する。それは無形の、神秘的な見えないものである。それは、簡単に「あなた自身」「わたし自身」であり、「人の品性」である。

「我々のアイデンティティ(個性)は、墓に入ったときとは同じ物質、粒子ではないけれども、復活の時まで保たれる。神の不思議な業は、人間にとっては神秘である。人の霊、人の品性は神に戻され、そこで保存される。復活の時に、すべての人は自分の品性を持つのである」(6BC1093)。

それは「心」とか「魂」とか言われることがある。ダビデがよく「我が魂よ主をほめよ」と言っているが、生きている自分自身のことを言っているのである。しかし、それは肉体を離れては、何の機能も果たさ

3:14「しかし、万一義のために苦しむようなことがあっても、あなたがたはさいわいである。彼らを恐れたり、心を乱したりしてはならない」

3:17「善をおこなって苦しむことは——それが神の御旨であれば——悪をおこなって苦しむよりも、まさっている」

ない。肉体が死んだら、意識があり、感情が働くというものではない。だからここで、「獄に捕われている霊ども」「牢屋の霊ども」というのは、罪のとりこ、すなわち罪人ということである。

ここで言わんとするところは、簡単明瞭にするところということである。つまり、キリストが、聖霊によってノアを通して説教したとき、罪の獄屋にいた人々が悔いて箱船にはいったのはわずか8人であった、ということである。決して、キリストが死んで、肉体を離れて伝道にいったのではない。そのように解釈すると、カトリックと同じ、靈魂不滅であり、死んでも煉獄でなお2回目のチャンスがあるということになる。人は死んで後、無意識で、知性も、感情もない。キリストの再臨の時、復活するまで眠っているのである。

聖書には矛盾のように見える、いわゆるパラドックス(逆説、矛盾らしきこと)がよくある。しかし、聖書を正しく学ぶなら、完全な調和を見るであろう。

ペテロはここで何を言わんとしているかを捉えることが重要である。ペテロ第一の手紙のメッセージは何であろうか？それはクリスチャンとして受ける苦難はどんなに幸いであり、特権であるかということである。「苦しみ、苦難、苦痛」が17回も出てくる。「あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」2:21。前後関係、文脈から聖句のいわんとするところをつかむと：

3 : 18 ~ 22 の挿入 キリストの苦難（十字架、葬り）と復活と昇天
 ノアの洪水（苦難、葬り） 救い
 バプテスマ（苦難、葬り） 救い

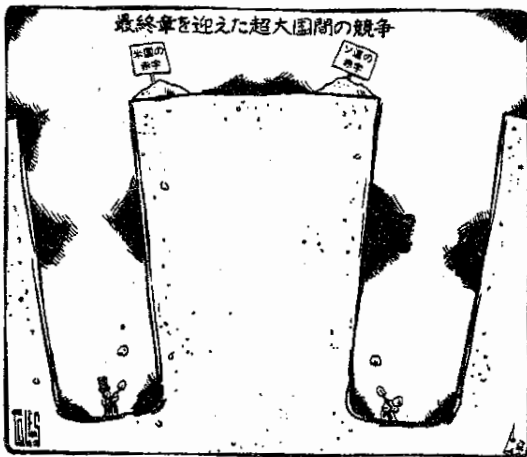
4 : 1 「このように、キリストは肉において苦しまれたのであるから、あなたがたも同じ覚悟で心の武装をなささい。肉において苦しんだ人は、それによって罪からのがれたのである。
 4 : 13 「むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、喜びにあふれるためである」

5 : 6 「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。

5 : 10 「あなたがたをキリストにある永遠の栄光に招き入れて下さったあふるる恵みの神は、しばらくの苦しみの後、あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろう」

キリストは十字架の苦難を通して、「神のみ座の右に」高められた。
 ノアたちも洪水というバプテスマを通して救われた。
 わたしたちもバプテスマ—死、葬り、復活して新しい命に入る。

そのように、苦難のバプテスマによって「罪からのがれる」のである。低くされる経験を通して高められる。「しばらくの苦しみの後、いやし、強め、力づけ、不動のもの」とされるのである。■



世界の国々はどこも赤字である。日曜休業令がアメリカから発布される。アメリカは、三つ子の赤字と言われている。財政赤字、貿易赤字、生活赤字。日曜休業令とどんな関係があるだろうか？

「また、第4条の要求を主張して日曜日尊重を傷つける者は民を悩ます者であって、神の恩恵とこの世における繁栄の回復を妨げている、と宣言される」 大下353。（日本訳には「回復」が抜けている）。



新刊書紹介

伝道用として書かれた本。ダニエル、黙示録を説きながら、SDAの主要教理を取り扱っている。(290頁)

舞台裏で行われている「隠された戦い」はあるのか？聖書は現代に何を預言するのか？世界をコントロールしている本当の力とは？「背教の者」(反キリスト)とは誰なのか？次に起こる世界的事件は何か？世界最後の戦いとは？一ハルマゲドン？「隠された戦い」でのあなたの役割は？

著者：デビッド・ミラー

訳者：砂川満

定価：2,000円(送料含み)

申し込みは：

郵便振替 口座番号 京都9-74528

ファイナル・アワー出版 〒622-02

京都府船井郡丹波町曾根清長60-32

編集後記

アンカーの出版がこんなに遅れて、読者の皆様にはご迷惑をかけています。いろいろ忙しいことが続いたり、また、印刷関係の環境設定のために時間がかかりました。これから頑張りたいと思います。皆様のお祈りを必要としています。

今日、国内、国外、全世界が近い将来の未曾有の事件に向かって激動していることを感じている人は少なくはないと思います。エジプトの地震、イタリアの洪水、フランスの洪水、オランダの飛行機墜落事件、アメリカの竜巻、南米での津波...と次から次と起こっています。世界経済の破綻、国々の政治界の動揺、人種・民族問題の増大、地球環境の危機、人心の腐敗、宗教界の混乱...いよいよ預言された終末諸事件のクライマックスに突入するときに、我々は生存しています。

預言の民として、み言葉によって目覚め、花婿キリストを迎える準備の優先順位を整えるようにしたいものです。

★ この印刷物は信徒によるもので、皆様の祈りと自由献金によって続けられています。一部350円ほどの献金をお願いできれば幸いです。尚、資料代や献金などの送金には郵便振替をご利用ください。振替口座番号は下記です。

鹿児島 8-12121 サンライズ ミニストリー

住所 〒905-14

沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471番地

サンライズ ミニストリー内 アンカー係

☎ 0980-56-2783

FAX 0980-56-5083

お化粧の事

聖書は何と語る：

メーキャップ、装身具、 宝石... について



ジョー・クルーズ

Amazing Facts
Radio Speaker
「驚くべき事実」ラジオ伝道者

どうして教会は、お化粧、宝石装身具、ダンス、映画、音楽、食事、服装などについてとやかく言うのか？ そんなことまで拘束するから、現代の青年たちに嫌われるのだ。人々は寄りつかなくなる。個人の自由と権利を主張する時代に教会の標準はどんな位置を占めているのか。救いと関係するのか。クリスチャンになるということはどんなことを意味するのか。

神学用語は使っていないが、非常に大事な実際の神学が説かれている。信仰と行いの関係。信仰によって義とされるということは、実際の生活にどのように影響を及ぼすか。このトラクトは変わりつつあるSDA信者にとって必読書の一つ。

定価 200円